



ガーデニングの季節です。欧米の家庭はたいてい庭に芝生をはりめぐらし、あちこちに場所をとって花を植えます。花はきれいなものですが、そんな中で一つだけわたしが受け入れ難い花があります。その名はタンポポ。何年もこのしつこい苦痛をもたらす悪名高い雑草から我が家の芝を守り続けてきて、タンポポに抱く気持ちは軽蔑以外のなにものでもありません。根っこから抜こうといつも何時間も父親と頑張ったものです。タンポポを抜いてみたことがありますか。根っこが絶対地球の真中まで到達しています！

そんな私ですから、誰かがある日、「夕日をバックにあぜ道のたんぽぽがきれいだ」と言ったとき、ビックリしました。何？タンポポ？きれいですって？ノー！いったい何の話？でもそこで私は考え始めたのです。ここではタンポポは雑草ではないのかも。芝生で何時間も草取りをする必要がないならば、タンポポに偏見を抱くこともないでしょう。

あの会話以来、タンポポの見方が変わりました。沈む夕陽に照らされて、うーん、きれいに見えなくもない。これも物の見方なのかな、と思います。心を開いて世の中をいろんな方向から見ると目が開かれるようです。それに、そもそも花がきれいでないわけがないですよ。

Perspectives



ヒロノカ

Gardening season! Western houses usually sport lawns with patches of earth set aside for beautiful flowers. However, there's one flower that I've always turned my nose up at. Dandelions. After years of fending our green lawns from the ever persistent, anguish causing, infamous weed, I've held nothing but contempt for the plant. I'd spend hours at a time digging dandelions out by the roots with my dad. Have you ever tried to pull up a dandelion? I swear, the roots go down to the center of the earth!

So, I was surprised when someone told me how beautiful he thought the dandelions looked in-between the rice fields under a setting sun. What?? Dandelions? Beautiful? No!! What was he talking about? Then I started thinking. I guess dandelions aren't weeds here. I guess if you didn't have to spend hours weeding a lawn, you wouldn't have a prejudice against them. Since that conversation I started trying to look at the dandelions in a different light. Under the light of a setting sun... maybe they could be beautiful. Maybe it's just how you look at them. I think that opening your mind to look at the world in different ways can be very enlightening. Besides, how can a flower not be beautiful??

英語学習指導員 宮地晶子の

エイゴのマナビカタ

第16回

国際交流とは？

先日JICAの研修生8カ国11名が東川第三小学校を訪れました。出身国はネパール、アフガニスタン、ベリーズ、ボリビア、グアテマラ、パプア・ニューギニア、モロッコ、バングラデッシュとさまざまで、それぞれが民族衣装に身を包んだ姿は圧巻の一言でした。

なんとか最低限のことは伝えたい、とお互いに暗記してきた片言の英語と日本語。そのレベルが丁度同じくらい。「はじめまして」や「ありがとう」。複雑な言葉ではなくても、相手のために一生懸命覚えたとわかる言葉はそれだけで非常に意味があります。子供たちはこの日のために遠

い国のことを調べたり、自分たちの持っているものを見せようと練習してきました。もちろん英語も。帰る際には研修生はみんな涙だったと後から聞きました。

国際交流って面はゆい言葉です。国際理解教育に詳しい人はそれを「パンダ講座（めずらしい人を連れてくるだけの意）」といって揶揄します。

そうですね。外国の人を連れてきて、それで終りではその言われても仕方ありません。でも、子供たちの頑張りや先生方や地域の方々の協力でそれ以上のものになることができるはず。見かけや言葉が違っていてもお互いに思いやりを持って接したらとても楽しい時が過ぎせるということ、言葉ができればもっとわかりあえるということ、もっと相手を知りたいという気持ち、子供たちの心の中にそんな種が蒔けたはず。国際交流はパンダ講座ではなく未来につながる種ときです。